

母と子の一对一の会話が必要

赤ちゃんは、生後三か月ごろから、しきりに「アー」とか「ウー」とか、意味のないことを言うようになります。この時期に、お母さんが相手になりますと、長い時間続けて言うようになります。

これは大切なことです。忙しいお母さんのために、生後一年間を完全保育してくれる施設があります。他のことは、家庭以上に行きとどいた保育がなされますが、この言葉の教育だけがどうしてもできません。

それで、こういう施設ではこれを恐れて、一年以上は、預からないことにしているのです。母と子の一对一の会話、これは、何にもまして赤ちゃんに必要なことなのです。

親の発音を聞いて、それを真似て自分も発音しようと努力する、そこに、発声能力や発声器官の発達があるのです。この教育は、この時期だけのものです。“早すぎる”のはいけません、こんな時期にも、それに適した教育というものがあるのです。その適した教育を施すことを怠ってはなりません。

片言は自分の欲求表現

赤ちゃんは、生後八か月もすると、「アーアー」「ウーウー」から「マンマ」「オッパイ」といった意味のある言葉が言えるようになってきます。

これより一歳半までくらいの時期を“片言期”^{かたことき}と呼んでいます。この時期に、発音は不完全ですが、自分の発音する言葉の効果を知り、自分の欲求を音声によって表現するようになります。

もちろん、この時期にも、出来る限り、積極的に愛情をもって語りかけてやるのが大切です。幼児は、これによって聴覚器官を発達させますし、この語りかけに応じて発声器官を使い、これを発達させるからです。

ただ、この時期の発音は、サ行がタ行に、ラ行がダ行に発音されやすいものです。たとえば、「サクラ」が「タクダ」に、「ローソク」が「ドートク」になったりします。これは、サ行やラ行の発音がむずかしいからです。だから、これは聞き流して、改めようと思わないことが大切です。ただ、親としてはあくまでも正しい発音をして聞かせなければなりません。